

# 土佐のわらべ

第423号《第445回（2017. 2. 9） 子どもの本の読書会記録》参加者6人・文書参加2人

## 『水はみどろの宮』 石牟礼 道子/作 福音館書店（福音館文庫）

昔、東北の溪流を旅したことがあります。初秋の頃で、銀色の細葉が川面に向かって次々と舞い散っており、鈴を振るかのような微かな調べが耳の底にとどいていました。川の流れる音ではなく、その場の空気全体が奏でている音楽とでもいうような、不思議なものであったと記憶しています。

今回この本を読んでいる時、この溪流で聞いた調べが蘇りました。何とも言えぬ上品な音、胸悲しく美しく、そんな音色がこの本を読んでいる間、心の中に響いていました。

渡し守の千松爺の孫、七つになるお葉は、穿の宮の湖の底を浚える千年狐のごんの守と出会い、山の声を聞くようになります。山と水、荒ぶるも美しき自然と生きる者たち、これらが渾然一体となって描かれる前半の「水はみどろの宮」。そして、十三年に一度の虹の宮お神楽の神々しさと、黒猫おノンの母性に涙がこぼれそうになる後半の「花扇の祀」。

本当に味わい深い今月の課題本でした。読書会でも皆様から様々な感想がありました。ここにご紹介します。

- ・土佐にも魚付き林がある。自分の暮らしを守りつつ、山を美しく保ち、人がしていることで自然が再生していく、その大切さを思った。
- ・今の自然と、この本の中の自然は違うと思う。藤の花や川はあるけれど、人の恐れ敬う気持ちが今は無いのでは…。今の自然保護は頭で考えるものになっている。
- ・イメージの広がりが凄い。

- ・自然や人、動物等を敬う気持ちや、見えないけれど畏れ多い何かを感じることは、幼いうちに育んでいきたいものだ。
- ・お葉とごんの守は、これからどうなるのだろう。
- ・今まで読んできたお話は、人が中心のものが多かったが、この話の中では人は特別な意味を成さない。あくまでも、自然の一部なんだなという印象を受けた。
- ・方言に優しさを感じた。特に「じゃろう」とか「のう」といった語尾に。音読したらよかったように思う。
- ・歌（詩）がたくさん挿入されて、まるで少し前の英米児童文学のようだと思いながら読んだ。
- ・メロディーが聴こえてきた。お能のように、節に合わせて。
- ・地震時の千松爺の対応、身を守る知恵に惹かれた。
- ・主人公のお葉よりも、動物や植物、自然のものの方が鮮やかで、よく動いているように見えた。藤の花を特に覚えている。
- ・視点の転換や会話のかけあい等、頭や小手先だけでは書けないものだと思う。
- ・この本は1回では読みきれない、読みきるのは惜しい。自分の心境や生活を重ね合わせ、何度も何度も読んでいきたい。

高知城の梅の木もちらりほらりと咲きほころびました。黒猫おノンと白い子猫も、この読書会を覗いてくれていたかもしれません。

(N. T)